

ラグ・ヴィラ (Raghu Vira) 博士の中国旅行記

(試訳 2：内モンゴルおよび青海)

三宅伸一郎／ DASH Shobha Rani

はじめに

本稿は、20 世紀インドを代表する東洋学者にして政治家であるラグ・ヴィラ (Raghu Vira, 1902–1963) 博士による 1955 年 4 月からの 3 ヶ月間にわたる中国旅行の日記

Raghu Vira, *Prof. Raghuvira's Expedition to China*. (Śatapiṭaka Series Indo-Asian Literatures, vol. 76), Lokesh Chandra & S.D. Singhal (eds.), New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1969.

の一部の試訳である。すでに訳者たちは、広州訪問の記録部分についてその試訳を発表している (三宅伸一郎, DASH Shobha Rani「ラグ・ヴィラ (Raghu Vira) 博士の中国旅行記 (試訳 1)」『真宗総合研究所研究紀要』(31), 2012 年, pp.123–142)。本稿はそれに続くものである。ただし、今回発表するのは

1. 内モンゴル訪問時の記録 (pp.47–51：5 月 20 日～22 日)
2. 甘粛省の省都・蘭州から青海省の省都・西寧を経て同省最大のチベット仏教寺院クンブム寺 (塔爾寺) を訪問した後、西安を訪問するまでの記録 (pp.90–97：6 月 7 日～14 日)

の2つの部分に対する試訳である。

本来であれば、すでに発表した広州訪問に続く箇所の訳を進め、そちらから順次発表すべきであろう。今回、このような形となったのは、Śatapiṭaka Series に収録されているチベット語文献の具体的な収集情報が得られるのではないかという、訳者の一人・三宅の期待から、この部分に対する翻訳を優先的に進めたという事情による。

前回の試訳発表後、ラグ・ヴィラの中国訪問の記録が英語により出版された。

“3. Prof. Raghvira in Search of Art and Texts.”, IN Lokesh Chandra, *India and China*, (Śatapiṭaka Series Indo-Asian Literatures, vol. 650), New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan, 2016, pp.106–282.

内モンゴル訪問の記事は pp.146–152 に、青海訪問の記事は pp.190–195 に収録されている。

一瞥するにこの英語による記録は、我々の翻訳の原本から個人的な感想・文学的な表現を除いて英訳されたもののように見える。ただし、我々の翻訳の原本にない重要な情報も記載されており、今回の試訳発表に際し、それらについては、“Prof. Raghvira in Search of Art and Texts”として、その当該ページ数とともに訳注に記した。

今回発表する部分の原文には、チベット文字による表記が見られる。また、参考とした“Prof. Raghvira in Search of Art and Texts”にはモンゴル語も見られる。それらについて今回の試訳では、デーヴァナーガリー文字のローマ字転写と明確に区別するため、それぞれ「tib:」「mong:」としてそのローマ字転写を示した。

今回試訳を発表する部分の中で興味深いのは、内モンゴルと青海で、インドとの共通点・痕跡を探そうとするラグ・ヴィラの姿である。内モンゴル訪問の際、「モンゴル語の文法はサンスクリット語のようにたくさんの形で満たされ

ている」と、モンゴル語とサンスクリット語の間の共通点を見出そうとしている。青海にある大僧院クンブム寺を訪問した際、出されたバター茶や黒砂糖を見て「純粋なインドの食物がチベット人とモンゴル人のラマたちの生活の一部となっている」との感想を抱く。こうした点に、先稿でも指摘した、インド文化の要素を研究することによって、インド文化をアジア文化の師匠として位置づけるという、ラグ・ヴィラの姿勢がよく伺える。

(文責・三宅伸一郎)

試訳

内モンゴル訪問

1955年5月20日⁽¹⁾

[p.47] 我々の列車は、朝8時に北京を出発した⁽²⁾。途中、特記すべきことはおこらなかった。前と同じようにロバとラバ、畑と山が一緒に動いてきた。途中2つの有名な駅を通り過ぎた。一つは大同⁽³⁾で、もう一つは張家口⁽⁴⁾ (Kal-gan)。

北京から大同まで12時間の旅であった。すべての人は、この12時間のお茶のために、ひとり20セントずつ渡していた。何度も給仕がお湯を持ってきていた。何回だったかは誰も数えていない。

途中、中国で有名な万里の長城を越えた後、中国で有名な列車のエンジニアである Chan-Tyen-You⁽⁵⁾ と会った。彼は山岳列車の線路を建設するための革命的な考えを表明している。彼の助手は彼の娘である。列車は〔山を〕旋回しながら山を登っていくが、すべての山で可能であるわけではない。〔だから〕旋回する線路の代わりに、彼はジグザグの線路を建設している。最初の線路は、ひとつの山の頂点まで至り、少し下に下がって、もう一つの山の頂点に至る。

大同以降、我々のコンパートメントは空になってしまった。我々のベッドを広く、長く広げてもらった。列車の中はとくに寒くなかったが、外は零下になっていた。防寒のために各窓には2枚ずつのガラスがはめられていた。その間の2指の長さの空気の間層は、寒さが侵入するのをくい止めていた。

この列車の一つの車両は子ども連れの女性たちのものだった。子どもたちは静かであった。これはとても驚くべき事であった。泣いている、騒いでいる、何かをねだる、〔そういった〕何の音も聞こえなかった。しかし、何か特別な悪臭がした。食堂車へ行く途中、4度その車両を通った。食堂車で我々のテーブルは、他のテーブルとは違ったが、それにしても魚と肉の臭みが、すみずみから鼻を囲んだ。まるで我々が食べているものの匂いであるかのように思われていた。なんとかしてローティ⁽⁶⁾の2かけらほどを飲み込んで、この臭さから逃れるために、我々は自分たちの車両に戻って行った。

[p.48] 1955 年 5 月 21 日

朝 5 時に列車はフフホトに到着した。この町はモンゴル国 (moŋgol deś⁽⁷⁾) の首都である。人口は 16 万人。町は新市街と旧市街の 2 つの部分に分かれている。町の新市街にある大きなホテルに私たちは宿泊させられた。5 時 30 分に日の出を迎えたが、気温は零下であった。すべての服を着た後も、手と足がとても寒く感じた。6 時 45 分に、まさに 10 時になったかのように思われた。太陽は空のかなり上の方に昇ってしまっていた。

駅に降りたとたん、周りに煙突が見えてきた。巨大な工業地帯であると我々は理解した。しかし、聞いて知ったのは、これらの煙突が工場ではなく、大きな建物のものであったことである。寒さのため、すべての大きな建物では、たくさんの炭を燃やす必要があった。そして、その炭の煙が町に広がらないように、煙突がこんなに高くつくられているのであった。

Chung が来て、朝食が 8 時になると伝えられた。それを聞いて我々は、ホテルから外に出て町の古い城壁の方に向かった。〔町の中であるにもかかわらず、こんなところで〕はじめてフタコブラクダの群れを見た。今は冬の終わりなので、体の上から長い毛が抜けて、〔それを〕地面に落としながら歩いていた。毛のない皮膚の部分は、とても醜かった。ラクダの毛はとても暖かく、柔らかく、とても値段が高い。

1 時間 15 分ぶらぶらして、ちょうど 8 時に帰って来た。食堂では、我々以外、他に 3 人がいるだけであった。2 人は中国人で、1 人は西洋人であった。我々のところまで、肉と魚の匂いが届かないように、そうとう離れたところにテーブルが用意されていた。肉を見にすることだけでも、それが、我々の気分を害してしまう理由になることを、我々の友人たちはこれまでに学習し終えていた。⁽⁸⁾

フフホトでモンゴル人たちは、雌馬のミルクをよく飲む。雌馬の乳房は毛で覆われている。そのため、ミルクの中に小さな毛が見つかる。初めて馬のミルクを飲むと、のどが焼けるといわれている。味もとても変であった。何を言いたいかというと、我々の友人たちが雌馬とラクダのミルクの悪口を言い過ぎた

ために、この馬とラクダの国にやって来ても、我々はこれらのミルクを見る気にさえなくなってしまうていた。そして我々は牛乳だけを求めた。ここで牛乳はとてもおいしかった。乾燥した牛乳の膜も食べることができた。

フフホトとは「青い町」という意味である。それゆえ、町から外に出たところにある道の両側に咲く草の青い花が、「青い町」という名前の由来に思えた。しかし、本当の「青い町」の意味は、「緑いっぱい町」であって、これらの花とは関係ない。

ここはモンゴルの町であるにもかかわらず、中国人がたくさんいる。[p.49] まわりでは中国語が使用されている。学校では、モンゴル人の子どもたちだけがモンゴル語を勉強する。そして彼らも、10、11歳になると、中国語を勉強し始める。

フフホトには2、3のモンゴル寺院がある。朝9時30分に我々は席勒図召⁽⁹⁾(tib: Shri thu co 'jam dbyangs) 寺に行った。僧院長はサムテン (tib: bSam gtan) 師である。我々は彼に、白檀でできた鹿の像を贈った。僧院長はその像を胸に押し頂いて、寺院の屋根の上に作ってある法輪とその両側に立っている2頭の鹿を示した。すべてのモンゴルの寺院の上には法輪と2頭の鹿を見ることができる。⁽¹⁰⁾これらは仏陀の初転法輪のシンボルである。サムテン師も我々に絵を贈ってくれた。開け閉めできる木製の額 (chaukhat) ⁽¹¹⁾についている25枚の絵であった。何年もこれらの前にお香が焚かれていて、お香の煙で黒くなっている。絵画らしさが半分なくなっているが、これらに付着した親愛の煙は非常に貴重である。

僧院はとても大きく、豊かである。木製の柱の上に昇り龍の模様の入った絨毯が巻かれていた。ここには、チベットの完全な赤色版のカングェルとテンギェル⁽¹²⁾⁽¹³⁾がある。ラマは20人。その中の一人のラマは、きれいに絵を描く人である。彼は自分が描いた釈迦牟尼を贈ってくれた。

この僧院のすべてのラマはモンゴル人であるにもかかわらず、読むのはほぼチベット語のカングェルである。毎年すべてのカングェルを転読する。しかし、テンギェルは部分的にしか読まない。

フフホトで我々は、小学校、中学校、師範学校と幼稚園を見学した。幼稚園では、公務員たちの子どもだけであった。ここに大きな病院がある。公務員とその共産主義者のメンバー⁽¹⁴⁾以外からは診察料がとられていた。

夜、我々を歓迎するために、最大の劇場で歌と踊りが披露された。50 以上の男優と女優がいた。人々で建物はいっぱいであった。歌と踊りが終わってから、我々は男優と女優たちと握手を交わした。[その時] インドと中国の友情の歓声が建物中に響き渡った。

1955 年 5 月 22 日

フフホトから 1 時間埃を散らしながら、我々の車は法禧寺 (Fa-sī ssa) に到着した。これは中国語の名前である。別にモンゴル語の名前もある。中国語の名前の意味は、法楽の精舎 (dharma nandī vihāra) である。ここには 30 人のラマが住んでいる。⁽¹⁶⁾チベットのカンギュル・テンギュルの北京版およびナルタン版が完全に揃っている。それ以外に、ここには、5000 以上の木版が所蔵されており、それを使って、[p.50] 地理、モンゴル史、暦学・占星術、医学などの本が印刷されている。⁽¹⁷⁾

モンゴルのラマは肉食主義者ではない。肉食主義の食事の伝統は、中国の比丘たちにのみにある。この寺には、モンゴル語版のものとしてはカンギュルのみが所蔵されている。

ラマはカンギュルを読誦する。それもまたカンギュルのいくつかの部分のみである。『薬師 (Bhaiṣajyaguru) [経]』は特に崇拜される。その次は『般若心経 (Hṛdaya-pāramitā)』である。『華嚴経 (Avatamsaka-sūtra)』の読誦もされている。

活仏 (jīvita buddha, 活きた仏)⁽¹⁸⁾の説法のために、別の建物が作られている。この建物のまわりには中国語のお経が書かれている。帰る時、彼らは私たちに、ツォンカパの真鍮製の像、葉の上に描かれているマハーカーラの絵、一つの経本を贈ってくれた。

夕方 4 時に 8 人のラマによる「道 (pratipadā)⁽¹⁹⁾」の読誦を聞いた。読誦は記憶によっていた。時々経本を読んでいた。経本の名前は *Ārya-tathāgata *sitātapatre*

*aparājita-mahāpratyaṅga *pāramī-siddha-nāma dhāraṇī*⁽²⁰⁾である。

我々もラマたちといっしょに座って読み始めた。

vajrapāṇi phaṭ |
om anale anale |
khasame khasane |
vaire vaire |
saume saume |
śānte śānte |
dānte dānte |
viṣade viṣade |
vīre vīre |
devi vajradhāri |
bandha bandhani |
vajrapāṇi hūm phaṭ |
om hūm hūm drūṃ *phaṭ swāhā |
hūm drūṃ bandha phaṭ |
hūm drūṃ bandha phaṭ swāhā ||⁽²¹⁾

ここからもう一つの寺院へ行った。その中国語名は「大召無量寺 (Ta-chao-vū-lyāng-ssa)」であり、チベット語名はパクメーリン (tib: dpag med gling)⁽²²⁾である。ここで我々は『入菩薩行論』を贈られた。我々はインド人としてはじめて、今モンゴル国を訪問していると言われた。仏教徒であっても共産主義者であっても、すべての人々に愛情が満ちあふれていた。

ここは、草地である。ここに大きな樹木もしくは小さな灌木は非常に少ない。雌牛と雄牛には肩のこぶがない。馬とラクダは小さい。馬とロバとラバの形には大きな差は見えない。ここの記念庭園で一つの新しい生き物を見た。その名前は ssa-pū-śa-thāṅg である。ssa の意味は「4」、pū-śa の意味は「なし」、thāṅg

の意味は「平等」である。つまり、4つと同じではないという意味である。4つとは、牛、ロバ、羊、鹿を指す。大きさは鹿のようである。羊のような角がある。顔の形は、牛とロバに少し似ている⁽²³⁾。

[p.51] 犠牲者たちを記念する塔の上には毛首席の手書きによる文章が、一方は中国語で、一方はモンゴル語で書かれていた。「犠牲者万歳」と。

僧院をまわって見ていた時、我々は新しい仏像を見る事ができなかった。数年前から新しい仏像の造立は禁止されている。以前は、僧院で新しい像が造立されていた。真鍮、銅、銀、金を鑄込むための設備があった。そして、職人たちが僧院に住んでいた。今はたった一人か二人の画家が残っている。

「小さな小さな四日目の月」のような眼をしている人々が、我々の周りを囲んで立っている。道を通すために警察が来ていた。多くの場所で私たちのために、道の両側に警察が配備されていた。

モンゴル語は中国語と何の関係もない。我々と同じように、この言語にも一つの単語に多くの文字が使われる。モンゴル語の文法はサンスクリット語のよう⁽²⁴⁾にたくさんの形で満たされている。たくさんの接頭辞・接尾辞がある。中国語と異なり、意味は声調と無関係である。読者に楽しんでもらうために、いくつかのモンゴル語の単語と文章を、以下に示そう。

お元気ですか。 syan pyanā

私は元気です。 pī syanā

新中国ハイウェイ shin-hwa yaha-chikli

青い町招待所（これは外国人の友人たちが泊まる場所である） hohe-hata
chachilaha kachir

小さな学校 paka-sarkakali

師範学校 pakshin-amhin-sarkakali

薬の場所（病院） amchin-hariyanna

公演⁽²⁵⁾ altan-chichilak

死の町 kara-hata

カラホト (Kara-hata)⁽²⁶⁾ は旧市街である。ここから西夏語の仏典が見つかった
いる。一つの西夏語の辞書も見つ⁽²⁷⁾かっている。

*

*

*

青海訪問

[p.90] 1955 年 6 月 7 日

今朝 9 時半に朝の行事を済ませて、10 時に西寧⁽²⁸⁾に向け出発した。⁽²⁹⁾黄河の橋
を渡って、我々は川の流⁽³⁰⁾れに沿って進んだ。この川の色は黄色ではなく、泥で
汚れた色をしていた。我々は土の丘を越えて行⁽³¹⁾った。蘭州から西寧までは 200
クロージャカ (krośaka)⁽³⁰⁾以上の距離があ⁽³²⁾った。道全体は埃の帝国であ⁽³³⁾った。

〔道の〕両側にある少しでも平らな場所⁽³⁴⁾は、緑の田園とな⁽³⁵⁾っていた。しかし
我々は、埃が多⁽³⁶⁾すぎたため、この美しい景色を楽し⁽³⁷⁾むことができな⁽³⁸⁾かった。多
くは麦畑であ⁽³⁹⁾った。途中でにわか雨が降⁽⁴⁰⁾ってきたが、それでも埃は取⁽⁴¹⁾まらな⁽⁴²⁾か
った。

いくつかの場所では石で農⁽⁴³⁾業をして⁽⁴⁴⁾いた。まずは土、その上⁽⁴⁵⁾に小さな石を敷
いて⁽⁴⁶⁾いた。これは鳥を見⁽⁴⁷⁾た唯一の道であ⁽⁴⁸⁾った。鳩やカラス、雀。

西寧は青海省の省都である。どこを見⁽⁴⁹⁾ても家は土ででき⁽⁵⁰⁾ていた。我々が宿泊
したところは、もっとも大⁽⁵¹⁾きな場所であ⁽⁵²⁾った。ここには外国⁽⁵³⁾人が宿泊させ⁽⁵⁴⁾られ
る。

西寧からチベット語 (bhot-bhāṣā) が使⁽⁵⁵⁾われる。チベット文字はインド文字か
ら生⁽⁵⁶⁾まれている。その 1, 2, 3, 5, 9, 10 の数字を表⁽⁵⁷⁾す書体は我々のものと同
じである。

ここはとても寒⁽⁵⁸⁾い。この場所⁽⁵⁹⁾は経度 38 度⁽⁶⁰⁾に位置⁽⁶¹⁾しているにもかかわ⁽⁶²⁾らず、
モンゴル国よりもも⁽⁶³⁾っと寒⁽⁶⁴⁾い。ここから 100 クローシャカ⁽⁶⁵⁾の距離⁽⁶⁶⁾に草原⁽⁶⁷⁾がある。
そこは寒⁽⁶⁸⁾さのため⁽⁶⁹⁾に木が生⁽⁷⁰⁾えることは不⁽⁷¹⁾可能である。西寧は標高 8000 フィー
トである。

1955 年 6 月 8 日

夜 10 時に我々を歓迎するためにチベットとモンゴルの舞踊が披露された。最初の舞踊「我々の愛しい草原」。若い男女がはじめゆっくりなめらかにステップを踏みながら、1 から 1.5 手 (hath 手の先から肘までの長さ) 外に出ている袖を振りながら、踊ったり歌ったりする。歌の意味は、「家事を終えて草原から家畜を [p.91] 連れて帰ってくる」。若い男性は踊りながら口笛／指笛を吹く。

2 番目の舞踊：ある軍人の妻が夫に手紙を書いている。「共産主義 (sāmyavādī) の国で我々は幸せです。あらゆる点で発展している」。

3 番目の舞踊：共産主義の政府が来たことによってカザフ (kāzak)⁽³²⁾ 族の人々が喜んでいる。老人も若い男性のように仕事にうちこんでいる。間には道化師による笑いをさそう演技があった。

4 番目の舞踊：土族⁽³³⁾の人々が毛沢東を賞賛する歌を歌い踊る。

5 番目の舞踊：青海地方の中国語により青海地方の人々が、「1953 年に私たちは自分たちの代表者を自分たちで選んだ」という内容を歌う。

6 番目の舞踊：チベット人が首都北京を賞賛し、歌い踊る。「北京は我々の美しい首都です」。歌の題名は「Vālā Pei-ching」⁽³⁴⁾。

1955 年 6 月 9 日

クンブム (tib: sKu 'bum Byams pa gling) または塔爾寺

塔爾寺はツォンカパの生誕地である。これはアムド最大の僧院である。現在のパンチェン・ラマはツォンカパから数えて 17 番目の継承者⁽³⁵⁾である。彼はここで長年過ごした。共産主義政府による支配の後、パンチェン・ラマとダライ・ラマはともに旅をしている。以前二人は仲が良くなかった。パンチェン・ラマはラサに行くことはなかった⁽³⁶⁾。

塔爾寺は中国語による名前である。チベット語による名前はクンブムすなわち 10 万のブッタの寺院という意味である。寺院の中心に菩提樹⁽³⁷⁾があり、その葉それぞれに仏像があることで有名である。この菩提樹は見ることができない。常に寺 (mandir) に覆われている。もしこの寺を壊せば、中にある菩提樹とそ

の葉にある 10 万の仏像があるかないかを確かめることができる。

ここに 2000 人のラマが住んでいると聞いた。しかし我々が、彼らに会いたいと申し出た時、「特別な機会にのみすべてのラマが集まると」言われた。数年前、ダライ・ラマはここを訪れていた。彼の説法を聞くために 6, 7 千人のラマが集まった。

我々とともに、青海地方の文化と教育の部門の長であるソンラブ・ジャムツォ (tib: gSung rab rgya mtsho)⁽³⁸⁾ がクンブムにやって来た。彼は中国語の優れた書き手であるが、政府の規則にもとづき我々は二人の通訳者を通じて会話をしていた。彼は中国語を話さないでチベット語のみを話していた。一人の通訳がチベット語を中国語に通訳し、もう一人の通訳が中国語から英語に通訳した。

[p.92] クンブムには多くの立派な建物がある。これらの立派な建物にはそれぞれ図書館が設けられている。⁽³⁹⁾ そこにはカンギュルとテンギュルの様々な版が所蔵されている。

カンギュルは 1 年間に 8~9 回読まれる。テンギュルは 3 回読まれる。

クンブムに 4 つの学校がある。すなわち法の学校、タントラの学校、薬学 (auṣadha)⁽⁴⁰⁾ の学校、天文学の学校である。

法の学校には 1000 人の学僧 (bhikṣu vidyārthī) がいる。25 年間のカリキュラムが存在する。タントラの学校には 100 人の学僧がいる。20 年間勉強する。

アーユルヴェーダ⁽⁴¹⁾ と天文学の学校にはそれぞれ 200 人ずつの学僧がいる。修了するまで 15, 20 年かかる。

アーユルヴェーダにおいては、律以外に 4 つの特別な経文を勉強する。律に提示してある「頭蓋に関する学問 (karoti-vidyā)⁽⁴³⁾」を知っているものは、ここには誰もいない。

オーストリアの有名な地理学者ハラー⁽⁴⁴⁾ は、私のためにラサからダライ・ラマの絵を持ってきていた。この絵を私はクンブムの二人の活仏と高位のラマたちに見せた。彼らはその絵を、愛情をもって頭に押し頂いた。私はダラニを読んで聞かせた。そしてその意味を説明した。活仏たちはこの上なく喜んだ。

さあ、来てください。クンブムのいくつかの立派な建物を旅しましょう。ま

ず「お経を読む建物」である。チベット語で「ツォクチェン・ドウカン (tib: Tshogs chen 'du khang, 大集会堂)」という。一年間に4回、特別な祭りがおこなわれる。13のクラスがある。数多くの分野で問答がおこなわれる。疑問のある箇所を解釈するため、難しい質問に対する答えを得るために、何年も議論を重ねる。そして最後にみんなの満足と解決が得られる。

見るだけでこの建物の豊かさをよく理解することができる。とても分厚く、もっとも美しい毛糸で作られた絨毯によって柱が巻かれていた。それらの上にモンゴル語の単語が織り込まれていた。絵にあふれていた。あちこちに木製・土製・銅製の像がたくさん飾られていた。土製と青銅製の像はシーカン (si-kang⁽⁴⁵⁾) で作られる。北京もこれらが作られる中心地であった。あらゆるところにバター灯明が燃えていた。数時間ではなく、数週間かけても、人はこの寺院の一つ一つのことをじっくり観察しつくすことはできない。

第三世ダライ・ラマ遺影塔殿 (tib: rGyal ba bSod nams rgya mtsho'i sku gdung mchod rten)

これは二番目の偉大な建物である。ここに釈迦牟尼の千体の像がある。すべてまったく同じである。仏塔の上に三日月と太陽のしるしが付いている。その前に100の水の入った器と一つのバター灯明がある。

「オンマニペメフム」と書いてある7つの大きな丸い筒がある。⁽⁴⁶⁾ 行ったり来たりする時、ラマはこれらを [p.93] 回す。小さな2つの建物が作られていて、その中に本が置かれている。それを回すことによって本を読む功德が得られる。外に2つの石碑碑文がある。1つは歴史、もう1つのは布施者の名前である。⁽⁴⁷⁾

文殊菩薩堂 (tib: 'Jam dbyangs kun gzigs khang) は三番目の建物である。この中にツォンカパの像がある。右側にマハーカーラの恐ろしい象がある。同じ右側に手に経を持った仏教の5人の伝道者の像がある。⁽⁴⁸⁾ 反対側には Kālarava と別の3人の経を持った者の像がある。Kālarava の口は恐ろしい形で開いている。この建物にはラサ、デルゲ、北京とナルタン版がある。我々はここで初めてカンギュルのチョネ版を見た。⁽⁴⁹⁾ ラサで出版された新しいカンギュルをラマは「最も優

れており正確なもの」と認めている。

観音、文珠、持金剛の優雅な像は巨大である。文珠の前に5つのバター灯明が燃えている。カーリンディー（Kālinḍī）またはカーリデーヴィー（Kālidevī）の像の後ろにサラスヴァティーの像がある。サラスヴァティーの手にはヴィーナー（琵琶）がある。両者の像は3つの目を持っている。

弥勒堂（tib: Byams khang）

ランチャとヴァルトゥ両方の書体が使用されている。弥勒の巨大な像の前にバターで作られた小さな8つの仏塔がある。

大金瓦殿（tib: gSer sdong chen po）

ここでは菩提樹の上に仏塔が作られている。菩提樹は常に見えない。この仏塔の前でラマは五体投地をおこなう。

この建物で我々は最も美しい灯明台を見た。

仏塔の上にツォンカパの像がある。ツォンカパがインドに行ってしまい、彼に会いたいと願う母のために、ツォンカパは自分の像を送ったとの伝承がある。この像は、ガラスの中に置かれている。この建物のナルタンのテンギュルとラサのカングュルとともに写本である。これら以外到北京のカングュルもある。

これらの本は、仏塔の背後と側面に置かれている。図書館は一階にある。

ツォンカパの三歳と五歳の時の足跡が布の上に写されている。

我々は菩提樹仏塔を右繞した。そして、三階すべてを見学した。ここには数限りない器があり、そこには水が入れられ、仏陀の前に置かれている。二階のドアの上には「十相自在」⁽⁵⁰⁾がある。

釈迦仏堂（tib: Jo khang）

この建物には主尊として弥勒菩薩と釈迦牟尼が安置されている。釈迦牟尼は非常にきれいな頭飾りを被っている。

大厨房 (tib: Ja khang)

この建物ではラマたちのお茶が作られる。8 から 10 足分の直径の 3 つの [p.94] 大きな器がある。〔彼らは〕草を燃料の代わりにしている。建物の外の空間には建物よりも大きい草の塔が作られていた。

印経院 (tib: dPar khang)

クンプム寺の印経院は有名である。ツォンカパの著作はここで特別に出版されている。アーユルヴェーダと天文学の本も〔出版されている〕。

一人のラマは一日に 1000 ページの本を印刷することができる。18~20 人のラマがこの仕事に従事している。版木の膨大なコレクションがある。我々はそれらの目録を見たいと申し出たが、⁽⁵¹⁾ 無いとの返事であった。

医学堂 (tib: sMan pa grwa tshang)

これは、アーユルヴェーダの学校である。ここにもナルタンとラサのカングルが安置されている。アーユルヴェーダには 5 つの種類がある。ツォンカパと彼の弟子たちも、アーユルヴェーダに関するたくさんの著作を書き残している。

時輪学堂 (tib: Dus 'khor grwa tshang)

天文学の経文の多くはラサからもたらされている。「仏頂尊頂陀羅尼 (Usnisa dharani)」が印刷された布が⁵、高い柱の上から下まで取り付けられている。

祈寿堂 (tib: Zhabs brtan lha khang)

この建物の玄関／門には、以下のサンスクリット語による偈が書かれている。

śāsanadhṛcchabhikena supamkitaḥ kāmagvo 'mṛtadhīrapadaśrīḥ |
ātmabhunimaṇasaṁvidhupājānuttaraharmyamanantaṁ jayeyam ||

中央に釈迦牟尼とその脇にアーナンダ、もう一方の脇にカシャパと十八羅漢がいる。

護法神堂 (tib: bTsan khang)

〔この建物の〕柱はライオンの皮で覆われている。片側には死んだ動物がころがっている。もう一方には武器がころがっている。これらの死んだ動物と武器は、狩人 (ākhetak) たちがここに置いていったものである。これは彼らの懺悔であり、以降殺生しないという誓いの表れである。⁽⁵²⁾ この建物の中で一人が「ソルカ (Tib: gsol ka)」という名前の経文を読みながら、太鼓とシンバルを鳴らしていた。⁽⁵³⁾

建物をじっくりと観察した後、客間に通された。二人の活仏は、我々のために塩とバターのチャイ⁽⁵⁴⁾を持って来させた。それとともに炒めた大麦 (jau) の粉⁽⁵⁵⁾と、インドにもあるような茶色の砂糖を見てとても驚いた。中国内陸部のインドから何百コーシャ離れたところでは、純粋なインドの食物がチベット人とモンゴル人のラマたちの生活の一部となっている。

ラマになるために何の教育の必要もない。クンブムに入ればすぐに少年または青年はラマになってしまう。ここでもっとも年少のラマは5歳の子どもであり、私たちは彼のカラー写真を撮った。

ラマになった後は、一生勉強する。論書の解釈に参加するためには25年間の勉強が必要である。25年間の勉強の後、非常に深い論書の解釈がおこなわれる。この論書の解釈に合格したラマたちには称号が与えられる。今 [p.95] まで約400のラマたちにこの称号が与えられた。チベット語ではこの称号の名前を「ゲシェー (tib: dge bshes, kalyāṇamitra)」という。中国語ではこれを「po-ś (博士)」という。

私たちは最も年長の活仏に質問した。「あなたは釈迦牟尼のアートマン (我) と出会いましたか?」。彼は答えた。「瞑想の中にいる時、私のアートマンは釈迦牟尼のアートマンと出会う。そう信じています。他の活仏たちのアー

トマンと「釈迦牟尼のアートマンと」の出会いには、別の方法があるかもしれない」。

我々はもう一つの質問をした。「経を理解する際、疑いや困難が生じた場合、その解決策と解釈を活仏は釈迦牟尼に直接尋ねることができますか？」。答えは次のようであった。「私は、瞑想に深く入れば、私のアートマンがこの身体を離れて上へ飛んで行く。そして釈迦牟尼と会います。再び帰ってはきません。その代わりに、別のアートマンがやってきます。ゆえに、質問の答えは釈迦牟尼からは得られない。経の解釈を通してこそ、答えを得ることが可能である」。

二人の活仏は私のことをとても気に入ってくれた。彼らは歩いている時に私に金剛鈴と金剛杵⁽⁵⁶⁾とダマルと著名なラマの衣をプレゼントしてくれた。それらを、友情の証としてプレゼントしてくれた。ツォンカパと阿弥陀の像を、法の印としてプレゼントしてくれた。アーユルヴェーダの挿絵入りの著作を学問のためのプレゼントとして与えてくれた。⁽⁵⁷⁾

ツォンカパの19〔巻〕の著作と、そして彼の二大弟子の24〔巻〕⁽⁵⁸⁾の著作は、彼らからの偉大なプレゼントであった。白黒とカラーの写真を撮影した後、私たちは、おいしい喜びとともにクンブムを去った。

もっとも年配の活仏の最後の言葉は次のようであった。「あなたが〔ここに〕よく来てくれたことと、私たちからの友情のプレゼントの贈与は、古代の文化的関係の再開です。これがますます実りますように。成長しますように。そして、発展しますように」。

1955年6月10日

我々はクンブム寺（塔爾寺）への記念すべき旅を終えて、蘭州に到着した。インドのラジオ放送で、インドのニュースを聞きたい気持ちになった。「間にヒマラヤ山脈があるので、聞くのは不可能」との答えであった。

我々の招待所に泊まっていたインドから帰国したある中国人が「あなたはインドの玄奘です」[と言った]。

西寧の外事部の部長も、「あなたはクンブム寺（塔爾寺）に来た初めてのインド人です」と言った。

中国ではどこでも建設作業をする際、必ず考古学者たちが立ち会って、出土した古代の品々を持って行っていた。インドでもこの方法を真似するべきである。

訳注

- (1) 5月20日の記事は原文 p.45 ページから始まっているが、ここでは、内モンゴルへ向け出発した記述からその翻訳を示す。
- (2) この内モンゴル訪問には、現代中国を代表する言語学・仏教学者の李義林（1911–2009）と芸術家で長く中国西北部の文物管理に従事した張明坦（1917–1988）が同行している（原文 p.46 および “Prof. Raghvira in Search of Art and Texts” p.146）。
- (3) 山西省北部にある都市で、近郊に雲崗石窟がある。ラグ・ヴィラは、内モンゴルを訪問後、北京への帰途、5月23日に雲崗石窟を訪問・調査をおこなっている。
- (4) 河北省北西部にある都市で、内モンゴルに通ずる交通・貿易の要所。原文の「Kal-gan（カルガン）」という表記は同地のモンゴル語による名称。
- (5) 不詳。
- (6) 全粒粉をこねて作った無発酵生地を円盤状にし、鉄板上で焼いたパンのこと。ここでは、北京をはじめとする中国北部でよく食べられる「シャオピン（焼餅）」のことを指すか。
- (7) ここでは内モンゴルのことを指す。
- (8) ラグ・ヴィラ博士とその娘スダルシャナーが完全なベジタリアンであるということを理解したという意味であろう。
- (9) 1585年にアルタン・ハーンの子センゲドゥレン・ハーンによって建立された。菅沼晃『モンゴル仏教紀行』春秋社、2004年、pp.70–73 参照。
- (10) 八輻の法輪の左右に座した鹿を配置するこのモチーフは、チベット仏教圏にある寺院堂宇の入り口の屋上に必ずといっていいほどしつらえられているものである。
- (11) 掛け軸状の絵画「タンカ（tib: thang kha）」のことを指していると思われる。
- (12) 北京版のことを指すと思われる。
- (13) 原文は「lama」。ラマ（tib: bla ma）とはチベット語で、本来は「師」のことを指すが、ここでは僧侶一般をこう呼んでいる。
- (14) 共産党の党員を指すと思われる。
- (15) “Prof. Raghvira in Search of Art and Texts” p.148 には、チベット語による名称はテンガリン（tib: bsTan dga' gling）、モンゴル語による名称はシャシン・バヤスホラ・スム（mong: šasin bayasqola süme）であると記されている。同寺は1727年の建立で、「法禧寺」との名は、1785年に清朝から与えられたものであるという（菅沼前掲書 p.93）。

- (16) “Prof. Raghvira in Search of Art and Texts” p.148 には、僧院長の名前はブンツォク・ギヤムツォ (tib: Phun tshogs rgya mtsho) であると記されている。
- (17) “Prof. Raghvira in Search of Art and Texts” p.148 には、スムパ・ケンポ=イエシエー・ベルジヨル (Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor, 1704–1788) の全集の木版を所蔵との記述が付加されている。原文に掲載されている、ラグ・ヴィラとその娘スダルシャナーが木版印刷作業を見ている様子を写した写真 (No.49) には「スムパ・ケンポの全集を含む 5000 枚を超える数の木版を有するフフホトにある寺院の印刷所」とのキャプションが付いている。“Prof. Raghvira in Search of Art and Texts” p.149 にも同じ写真が掲載されているが、こちらのキャプションでは「フフホトにある寺院」ではなく「フフホトから車で 1 時間の場所にある法禱寺」となっている。スムパ・ケンポ=イエシエー・ベルジヨルは、東北チベット・アムド地方出身のモンゴル人で、歴史書『如意樹史 (パクサム・ジョンサン dPag bsam ljon bzang)』をはじめ、教義学から医学にいたるまで多岐にわたる数多くの著作を著した 18 世紀のゲルク派を代表する高僧である。長尾雅人は、1943 年に行った調査の際、法禱寺にスムパ・ケンポ全集の木版が所蔵されているのを確認し、その著書『蒙古学問寺』(全国書房, 1947 年, pp.314–341) の中で、木版所蔵庫内に設置してある目録板と、同全集の付属目録である『淨海影像 (Sum pa mkhan po dznya na shri bhu ti bas gsung chen po du ma las btus pa rnams kyi dkar chag dwangs mtsho'i gzugs brnyan)』に基づき、全 8 巻からなる同全集の全貌を紹介している。Śatapitaka Series ではスムパ・ケンポの全集が影印出版されているが (Collected Works of Sum-pa-mkhan-po, Reproduced by Lokesh Chandra from the Original Xylographs of Raghu Vira. 9 vols., Śatapitaka Series Indo-Asian Literatures, vol. 214–222, New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1975), これが、この法禱寺訪問の際入手したものであるかどうかは不明である。なお、スムパ・ケンポの全集は近年、青海省の共和県藏語文工作委员会弁公室が編纂した活字本が青海民族出版社から出版された (mTsho sngon zhing chen gung ho rdzong bod skad yig bya ba'i gzhung las khang ed., *Sum pa paṇḍi ta ye shes dpal 'byor gyi gsung 'bum*. 20 vols., Zi ling: mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 2015)。この活字本出版の経緯や背景を紹介しつつ、その価値を論じ、併せて木版本との対応表を示した以下の論考がある。Kim Hanung, “An Introduction to the New publication of Sum pa Ye shes dpal 'byor's Collected Works.” *Journal of Tibetology* (蔵学学刊). Vol. 17, 2017, pp.275–291.
- (18) 「化身ラマ (トゥルク, sprul sku)」すなわち、菩薩は衆生救済のため、姿を変え、あえて輪廻の世界にとどまるとの考えにもとづき、特定の高僧の化身として認定され、先代が有していた権利・財産・名前を受け継いだ僧侶のこと。「活仏」という呼称は、一般的にはまだ使われることが多いが、近年の学会では、誤った印象を与えるとしてその使用が避けられている。ただ、原文では「jīvita buddha」すなわち「活きた仏」となっているため、ここでは原文を尊重し、「活仏」という呼称をそのまま用いた。
- (19) 不明。

- (20) 『聖如来頂髻中出現白傘蓋無敵大廻折仏母寂妙成就陀羅尼』 (*Ārya-tathāgatoṣṇī-śasitātapatrā-aparājītā-mahāpratyaṃgira-parama-siddhi-nāma-dhāraṇī*. 'Phags pa de bzhin gshegs pa'i gtsug tor nas byung ba'i gdugs dkar po can gzhan gyis mi thub pa phyir zlog pa chen mo mchog tu grub pa zhes bya ba'i gzungs. Peking no. 203 rgyud, vol. pha 251a3-257a1, Derge no. 591 rgyud, pha 212b7-219a7) のこと。
- (21) 原文のデーヴァナーガリー文字をそのままローマ字転写した。前掲經典に収録されている陀羅尼 (Peking rgyud, vol. pha 255b7-8, Derge 218a3 rgyud, pha 212b7-219a7) にほぼ一致する。
- (22) フフホトにあるイフ・ジョー (大召) のこと。"Prof. Raghvira in Search of Art and Texts" p.148 には、僧院長の名前はラプヤン・コンチョク・ナムギェル (tib: Rab dbyangs dkon mchog rnam rgyal) であると記されている。
- (23) ここで言われている動物は、「蹄は牛に似たれど牛にあらず。頭は馬に似たれど馬にあらず。身は驢に似たれど驢にあらず。角は鹿に似たれど鹿にあらず」ということからその名が付いた、中国原産の大型ジカの一種であるシフゾウ (四不象) のことを指すと思われる。
- (24) ラグ・ヴィラは、モンゴル大藏經カンギュルに収録されている經典の題名や挿絵のキャプションなどに基づいて、モンゴル語・サンスクリット語辞典を編纂している。 *Mongol-Sanskrit Dictionary: with a Sanskrit-Mongol Index*. (Śāta-pitaka Series: Indo-Asian Literatures vol. 5), New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1959. その前書きに、モンゴル語の中でサンスクリット語がそのまま使われている例を列挙している。
- (25) 以下に示されているモンゴル語は、原文でデーヴァナーガリー文字で表記されているものをローマ字転写したもので、本来のモンゴル語の表記ではない。
- (26) 内モンゴル自治区アルシャー (阿拉善) 盟エジン (額濟納) 旗の旗政府がある達来庫布鎮の東方 25 キロにある西夏王国 (1038-1227) の都市遺跡。
- (27) ロシアのピュートル・コズロフ (Pyotr K. Kozlov, 1863-1935) の探検隊が 1908 年にカラホトで発見した西夏語文献のうち、1909 年にアレクセイ・イヴァノフ (Aleksii I. Ivanov, 1878-1937) によって見出された骨勒茂才が 1190 年に著作した西夏語と漢語の対訳単語集『番漢合時掌中珠』のこと。西田龍雄『西夏語の研究上巻』座右宝刊行会、1964 年、p.5 および西田龍雄『西夏王国の言語と文化』岩波書店、1997 年、pp.283-290 参照。
- (28) 朝の行事とは、朝食のことを指すか。
- (29) 内モンゴル訪問後、北京に戻り、蘭州を経由して 5 月 28 日に敦煌に到着。6 月 4 日までの間、敦煌で調査を行った後、蘭州に戻り、そこから西寧に向かっている。
- (30) クローシャカの意味は不明。距離の単位としてクローシャ (krośa) がある。1 クローシャの距離は文献によって異なるが、一般には約 2 キロのこととされている。ただそうすると、200 クローシャは 400 キロメートルとなり、蘭州・西寧間の実際の距離 228 キロメートルとは大きな差が出る。
- (31) チベット文字がどの文字を元にして作られたかについては、以下のような研究が

ある。Sam van Schaik, “A New Look at the Invention of the Tibetan Script.” *Old Tibetan Documents Monograph Series*, vol. III, edited by Yoshiro Imaeda, Matthew Kapstein and Tsuguhito Takeuchi. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies, 2011, pp. 45–96.

- (32) カザフ族（哈萨克族）は、カザフスタンと新疆ウイグル自治区を中心とした中央アジア西北部に居住するチュルク語族系の言語を話す民族で、イスラム教を信仰している。
- (33) 土族（モンゴル族 Monguor 族）は、青海省東部・海東市の互助県、大通県、民和県を中心として居住する。蒙古族系の土族語を話す。黄南州同仁県、甘肅省天祝県にも居住している。
- (34) 中国語の音写と思われるが、同定できない。
- (35) パンチェン・ラマの系譜は、ツォンカパの二大弟子のうちの一人ケードゥブ＝ゲレク・ベルサン（mkhas grub dGe legs dpal bzang, 1385–1438）から始まり、ラグ・ヴィラが青海を訪問した際のパンチェン・ラマは、そこから数えて 10 世に相当する。「ツォンカパから数えて 17 番目の継承者」との根拠は不明。
- (36) 1923 年、チベット軍の維持費用 4 分の 1 をタシルンポ寺が負担するとのダライ・ラマ 13 世（Thub bstan rgya mtsho, 1876–1933）の決定に反対したパンチェン・ラマ 9 世（Chos kyi nyi ma, 1883–1937）が、中国に向けて亡命し（ロラン・デエ『チベット史』今枝由郎訳、春秋社、2005 年、p.278 参照）、亡くなるまでタシルンポ寺に帰還することができなかったことを指すか。
- (37) ツォンカパが誕生した際、切った臍の緒から地面に一滴の赤い甘露（血）が滴り、そこから生えてきたそれぞれに獅子吼仏の姿のある十万の葉が繁る菩提樹（cf. *sKu 'bum gdan rab dkar chag*: 271a4–6）。
- (38) ソンラブ・ジャムツォ（gSung rab rgya mtsho, 桑熱嘉措, 1896–1982）は、現在の青海省化隆県巴燕鎮石大倉郷出身の学者・教育家・翻訳家。7 歳で出家し、9 歳の時にディツァ・タヒー・チーダン（IDi tsha bkra shis chos sdangs）寺に入門し修学を開始し、1938 年にラブジャム・ゲシェー（rab 'byams dge bshes）の称号を与えられた。1939 年に、当時青海を支配していた回族軍閥の馬歩芳（1903–1975）に招かれ、その息子のチベット語教師を務める。青海省政府の秘書も務め、在任中には青海蒙藏第一小学校のチベット語教師も務めた。1949 年の「解放」に際しては、人民解放軍を西寧で出迎え、中国共産党の政策・宗教信仰自由の政策をチベット語に翻訳した。1951 年から文化大革命が始まるまで、青海省教育庁の副庁長・庁長と要職を歴任し、その間、牧畜民たちのためにテントの小学校を開設するとともに、教員養成学校の開設、チベット語による教科書の作成など行い、民族教育の基盤を築いた。1951 年には中華人民共和國建国後初のチベット語新聞『青海藏文報（*mTso sngon bod yig tshags par*）』を創刊、1952 年には青海人民廣播電台からのチベット語によるラジオ放送の開始に尽力した。1954 年からは映画の翻訳にも携わった。以降、『毛沢東選集』のチベット語訳、4000 語にも及ぶ訳語の策定など、中国語・チベット語翻訳にも大きな業績を残した。さらに 1963 年にはツェテン・シャブドゥン（Tshe tan zhabs drung 'Jigs med rig pa'i blo gros, 1910–1985）らとともにケ

サル王物語のうち『ホル・リン大戦 (*Hor gling g.yul 'gyed*)』の物語の編纂を行った。このようにケサル王物語の収集・編纂事業に従事している間に文化大革命が発生し、1965年に財産を没収され、故郷での労働改造を命じられる。文化大革命終了後の1979年復帰し、青海省政協副主席に選出され、その後、第4届全国政協委員に選出される。1982年6月22日、西寧にて没。著作に *Sum rtags gnyis kyi tshig don mdor bsdu* (蔵文文法簡編), Zi ling: mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 1955 がある。また、没後直後に刊行された雑誌 *sBrang char* (章恰爾). vol. 7, 1982, pp.71-79 には、トゥンカル=ロプサン・ティンレー (Dung dkar Blo bzang 'phrin las, 1927-1997) や学生たちによる追悼文とともに、ソンラブ・ジャムツォが著した2篇の詩が掲載されている。以上、Mi nyag mgon po, *Gangs can mkhas dbang rim byon gyi rnam thar mdor bsdu*. Vol. 2, Pe cing: Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 2000, pp.445-461 掲載の略伝を参照した。

- (39) クンブム寺にあるセルトク (gSer tog), マニ (Ma ni), アジャ (A kya) の3人の化身ラマの各邸宅に所蔵されているチベット語文献については、次のような調査報告がある。大正大学総合仏教研究所 (編)『中国青海塔尔寺仏教文献目録 (増補改訂版)』大正大学総合仏教研究所, 2000 年。
- (40) 「4つの学校」の「学校」とは「学堂 (grwa tshang)」のことで、「法の学校」「タントラの学校」「薬学 (auśadha) の学校」「天文学の学校」はそれぞれクンブム寺にある「教義学堂 (mtshan nyid grwa tshang)」「密教学堂 (rgyud pa grwa tshang)」「医学堂 (sman pa grwa tshang)」「時輪学堂 (dus 'khor grwa tshang)」のこと。
- (41) ここではチベット医学を指す。なお、前の段落に見られる「薬学 (auśadha) の学校」と、ここでいう「アーユルヴェーダの学校」は、ともに「医学堂」を指す。なぜ異なった呼称を用いているのかは不明。
- (42) 「4つの特別なテキスト」とは、チベット医学の根本文献『四部医典 (*rGyud bzhi*)』のことを指すと思われる。
- (43) 「頭蓋に関する学問 (karoti-vidyā)」が何を意味するのかは不明。医学堂に関する記述であるため、脳の外科的手術のことを指すかもしれないが、「律 (tib: 'dul ba) に提示してある」との記述に合わない。
- (44) オーストリア出身の登山家で、1944年から1951年までチベットで過ごしたハインリッヒ・ハラー (Heinrich Harrer, 1912-2006) のこと。
- (45) 1939-1955年の間、現在の四川省カンゼ (甘孜) 州・ンガワ (阿壩) 州を含むチベット人居住地域に設置されていた西康省のことか。
- (46) いわゆる「マニ車 (ma ni 'khor lo)」のこと。
- (47) 陳慶英, 馬林 (編)『青海藏伝佛教寺院碑文集訳』(『西北少数民族文字文献』第12巻, 中国西北文献叢書第5輯 154, 蘭州古籍書店, 1990年所収)に、クンブム寺にある13点の石碑碑文とその中国語訳注が掲載されている。そのうち「7. 九世班禅舍利靈塔碑」(1939年建立)が、その所在場所が一致することから、ここでラグ・ヴィラの言う2つの石碑のうちの1つであろう。もう1点については特定でき

ない。

- (48) 不明。
- (49) ダライ・ラマ 13 世の発願・監督のもと、その没後の 1934 年に完成したラサ版カンギュルについての多田等観（1890–1967）による次の紹介文は、その開版作業を実践した者の記録として興味深い。多田等観「東京大学文学部所蔵ラサ版大蔵経について」『多田等観全文集：チベット 仏教と文化』今枝由郎監修・編集、白水社、2007 年、pp.253–256。
- (50) 原文では、「hkšmlvryam」。ランチャ文字の「ya」「ra」「va」「la」「ma」「kša」「ha」の 7 文字と、「莊嚴点」「空点」「ナーダナーダ点」を縦に組み合わせて作られた『時輪タントラ (*Kālacakra tantra*)』の宇宙観を示すモノグラム。田中公明『超密教時輪タントラ』東方出版、1994 年、pp.54–57 参照。
- (51) クンブム寺の歴代座主記・礼拝対象物目録であるセルトク＝ロプサン・ツルティム・ギャツォ (gSer tog Blo bzang tshul khriṃs rgya mtsho, 1845–1915) 著 *Chos sde chen po sku 'bum byams pa gling gi gdan rabs rten dang brten par bcas dkar chag ched du brjod pa don ldan tshangs pa'i dbyangs snyan* 296b2–3 には、印経院所蔵の木版について「rje yab sras gsum gyi gsung 'bum / po ti lnga'i rtsa 'grel gyi yig cha / a kyā yongs 'dzin blo bzang don grub dang / a lag sha lha rams pa ngag dbang bstan dar gyi gsung 'bum gtso bas dkar chag zur gsal ltar gyi ci 'dod re ba kun skong gi dpar shing mtshar du dngar ba bzhugs /」とある。
- (52) 青海省社会科学院塔爾寺藏族歴史文献研究所（編著）『塔爾寺概況』青海人民出版社、1987 年、p.68 には、「堂の正面の中庭は正方形で、二階建ての回廊が中庭の壁の代わりとなっている。回廊の 2 階には、熊や野牛、野生の羊などの標本がある。これらの標本は、護法神に調伏された悪魔を表している（殿前庭院呈方形，以双層回廊代替院壁。回廊楼上，分別陳列着熊，野牛，野羊等標本，使人望而生畏，這些標本代表被護法神制服的惡魔）」とある。
- (53) 「ソルカ (gsol ka [sic. kha])」は、神々への供養のことを言う。固有の文献名ではなく、儀軌総体を指すいわばジャンルの名称。
- (54) チベットで飲まれるいわゆるバター茶のこと。
- (55) チベット人の主食の一つで、はだか麦 (tib: nas) を炒めて粉にしたツァムパ (tib: rtsam pa) のこと。
- (56) 法要の際に用いられる「でんでん太鼓」に似た小型の太鼓のこと。
- (57) Lokesh Chandra (ed.), *An Illustrated Tibeto-Mongolian Materia Medica of Ayurveda of 'jam-dpal-rdo-rje of Mongolia: from the Collection of His Holiness Z. D. Gomboev*. (Śata-piṭaka Series: Indo-Asian Literatures vol. 82) New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1971 は、*gSo byed bdud rtsi'i 'khrul med dngos 'dzin bzo rig me long du rnam par shar pa mdzes mtshar mig rgyan* と *Dri med shel phreng nas bshad pa'i sman gyi 'khrungs dpe mdzes mtshar mig rgyan* というチベット医学に関する挿絵入りの文献 2 種を影印収録したものである。2 種の文献のうち前者の版面には、各葉のウラ側左マージンに葉数がチベット文字数字で表されるなどモンゴルで開版された木版本の特徴が見

て取れる。一方後者は、その奥書の記述から、宣統3年（1911）にクンブム寺の医学堂で開版されたものであり、これが、クンブム訪問の際に贈られた「アーユルヴェーダの挿絵入りの著作」である可能性が強い。

- (58) ツォンカパの二大弟子ケードゥプ＝ゲレク・ペルサン⁵⁸の全集16巻とギエルツァプ＝タルマ・リンチェン（rGyal tshab Dar ma rin chen, 1364–1432）の全集8巻を合わせて24巻となる。